

文学の研究〔Ⅲ〕

— 異質文化接触の問題・外国文学の研究 —

析 原 知 雄

I

今回は、異質文化（文学）接触の問題をとりあげて、外国文学研究の問題点を考察してみようとするのであるが、川端康成文学が、ノーベル賞選考委員会の判断により、日本で、はじめてのノーベル文学賞受賞となった折から、この問題は一般読書界にも興味ある題目だと思うのである。川端文学ノーベル賞受賞理由は「日本人の心の精髓をすぐれた感受性をもって表現するその叙述の巧みさ」というのであり、日本の古典文学の基本に忠実であり、また紫式部にまでさかのぼる繊細な詩的描写があり、東西の精神的な懸橋となったという判断であったであろう。この判断は川端文学を十分に理解し、民族的特質を反映する文学として評価したことになるが、そしてそれはその通りであるけれども、この際、外国文学を読むということ、外国文学の鑑賞ということから起る諸種の問題点に触れてみなければならないと考えるのである。

先づ、他国文化の摂取（“The assimilation of a foreign culture”）という点で真先に思い起す評言は正宗白鳥の次の指摘である。即ち、「外国の思潮や文学が日本にはいつて来ると稀薄になり、手軽くなる実例は、明治文学史によってもよく証明される。」^{注1)}日本の不毛な文学的風土の問題が、ここに潜んでいるかも知れないが、この不毛という性質だけをとりあげてみると、60年或は70年前のアメリカにもこの文学的風土のカラーは異っていても、どこか似かよったものであったといえるのではなからうか。「芸術の華は、土壌の深い場所のみ咲くものである。…少しの文学を生むためにも非常に多くの歴史を必要とする。…作家を活動させるには複雑な社会機構がなければならない。「…the flower of art becomes only where the soil is deep … it takes a great

deal of history to produce a little literature… it needs a complex social machinery to set a writer in motion”^{注2)} というのが Henry James (1843—1916) の見解であった。James に文学生活へ導く大きな動因をつくってくれた先輩でもあり親友でもあった William Dean Howells (1838—1920) がアメリカとアメリカ人を材料として、それを最大限に利用して作品を書いたのに反して、James は若い頃、「小説家を活動させるのには古い文明が必要であるという考え」(“The idea that it takes an old civilization to set a novelist in motion”)^{注3)} を自明の理として、James は自分に関する限り、その作品はヨーロッパに投書しなければならぬという確信をもつに至ったのである。James は 1876 年以来イギリスに定住し、40年後他界する直前 (1915) 英国に帰化し、その翌年、功労勲位 (Order of Merit) を授与されることになったのである。1936年 Ezra Pound がノーベル受賞者のリストのうちに、あきらかにその中に入るべき名と目される Henry James がいないことを歎いたことがあるが、^{注4)} この巨匠、名技巧家であり、美と真理追求の不屈の闘士であった James が、ようやく今日大きく “revival” をみることになったのである。

今回の問題点を追求するに当たって、主に二人の文学者、広大な知識を基とし、豊衍な想像力を駆使して、文学を研究し、文学作品を創作した夏目漱石と、今引き合いに出した Henry James の異質文化（或は文学）の接触の問題から入って行こうと思う。この両者は作家としても、又外国文学研究者としても特に秀れた才能をもっていたことは周知の事であるが、この二者の異質文化接触には相似点と相違点がある筈である。そしてこれを考察することは、外国文学研究における意義と目的を考えるために参考となると思われるのであ

る。漱石と James の関連は直接、今この問題ではないが、少しそれに触れてみることも不要ではない。漱石は慶応三年(1867)に生れ、大正五年(1916)に50才で永眠し、Jamesは1843年に生れ1916年に他界しているから、漱石は James より24年後に生れ、同年に死去している。漱石山房の蔵書目録("A Catalogue of Foreign Books")^{注5)}をみると、Jamesに関するものは四冊しかない。尤も当時 James の名を知らない日本の作家の中で最も早く James を読んだ人であったことは勿論だが、小説は、後期の三大作の一つ "The Golden Bowl" 「黄金の盃」^{注6)}のみであって他は James の評論である。その "The Golden Bowl" の Vol. I. PP. 32—3 (公爵とアシガム夫人との会見について)のところに「カカル精細ナル女の記述ハ古人ノ夢想セザリシ所ナリ。此ノ傾向の得失価値及び発達如何」と書きこまれている。更に James にとって不幸なことは Vol. II. PP. 15—23について「此人ノ文ハ分ルコトヲワカリニクキ言語デカクノヲ目的トスルナリ」という書こみがある。この作品を出版後まもなく漱石は購入したことは確かであるし、そしてそれを読了したとして、それを敬遠したとすれば、James 文学は日本に大変不幸なはいり方をしたことになると言わねばならない。しかし現在、日本では James の研究が進められ、1968年迄に数種の長篇と短篇が翻訳された。^{注7)} 翻訳を通して外国文学を摂取するという問題に一つの大きな材料と問題を提供したことになる。

II

外国文学鑑賞に際して、先づ最初に起る問題は、外国語を母国語同様、或は母国語に近い程度で読み得るかという問題である。これは言語芸術としての文学作品を読む場合に起る基本の条件である訳だが、この能力を大抵の読者に要求する訳にはゆかない。ここに外国文学研究の問題点があるのだが、その問題検討は別の機会に行うとして、翻訳文学をも考慮に入れて進まねばならないだろう。川端氏が「日本語で審査してもらったらもっとよかった」という意味のことを述べたとすれば、まさにこの事であり、翻訳ではいかに秀れたものであっても文学作品のもつ美的役割である視

覚音感などは翻訳では多く又は、ほとんど失われてしまう。従って、ほんとに、外国文学を鑑賞しようとするれば外国語の修練と研究なしには行われない。一国の言葉が読めるということは、話し、書き、聞き発音し、解釈する能力がそなわっていることである。論理的思考を中心とする種類の作品や、写実的描写を主としたものなどは原作の内容を伝達するという点で比較的原作に近いものとなるが、そうでない文学作品は当然ながら話の筋を読むのみでないから、ここに各国語の特殊性が問題となってくる。

次に、外国文学を読むとして、起ることは、日本人が欧米文学に接触する場合、その逆に欧米人が日本文学に接触する場合とアメリカ人がヨーロッパ文学に接する場合とは大いに相違がある筈である。これは言葉の問題の次に起る段階として、外国の風土、民族、国民性、風俗習慣等々の問題があるのである。論点を簡単にする為に結論的にいうならば、アメリカ人とヨーロッパ人との中には同じ血が流れている。尤も混血があっても、日本人とヨーロッパ人との関係とは違っている。同じ血が流れているばかりでなく同じ神をいだいでいることを知らねばならないだろう。日本人が欧米文学を読む場合と欧米人が日本文学を読む場合とは違って来る。筆者が度々論述を重ねて来た James 論及び James 文学論の重要点の一つはこの問題でもあった。James が描いたヨーロッパにおけるアメリカ人達は、特に James の小説に出場する主要人物はそのまま小説の主題となつたのであり、ヨーロッパの風土の借用という操作を経て、極く自然にアメリカの現実の一部になり得ているのを見ればよくわかるであろうし、更に又 James の主要人物達と永井荷風の「アメリカ物語」や「ふらんす物語」に出場する気障な「紳士」達とを比較してみれば事は簡単に了解される。日本の近代作家達の多くは鋭敏な感受性を西欧の風土に激突させて傷をうけたといえるだろう。それは外国文学の耽読或は研究の間に、又外国留学中に起っているといえる。そしてその中でも最も深い傷をうけたのが夏目漱石であったといえるのではなからうか。ここで漱石の場合を考察することになる。先づ漱石の外遊、即ち英国留学の場合から考えるとして、漱石の場合「外遊」な

どという文字通りの気楽なものではなかったのである。

明治39年11月の日附のある「文学論」の序文に漱石がイギリス留学を回顧した次の一文がある。即ち、「倫敦に住み暮らした二年は尤も不愉快の二年なり。余は英国紳士の間にあって狼群に伍する一匹のむく犬の如く、あわれなる生活を営みたり。倫敦の人口は五百万と聞く。五百万粒の油のなかで、一滴の水となって辛じて露命を繋げるは余が当時の状態なりという事を断言して憚からず」というのである。更に序文によれば、「余は特に洋行の希望を抱かずと云う迄にて固より他に固辞すべき理由あるなきを以て、承諾の旨を答へて退けり」とあるのは、五高が漱石を文部省に推薦し、文部省が漱石を留学生に指定したのだから、特に反対の理由がない限り承諾した方がよいのではないかといわれた時の返事である。又、文部省が漱石に命じた留学の目的はイギリス文学の研究でなくて、英語の研究であった。ただの英語を勉強するために人間を一人英国にまで派遣するというところに漱石には問題点があったのであろう。ともかくも気の進まぬままに英国留学を行うことになったのである。漱石のイギリス及びイギリス人に対しての違和感についてはここで詳述する必要はなく「文学論」の序文及び漱石全集にゆずる。「特に洋行の希望を抱かず」といったのは後年の文学博士の学位辞退の問題のときと同様に、漱石の気質を考慮すると反動的な心理作用でないかとの見解もなり立つだろうが、それはともかく、行きたくなくてイギリス留学となってしまったのである。出発の前々日寺田寅彦宛に書き送った漱石の句は、「秋風の一人にふくや海の上」というのであった。筆者は論述を進める為に急いでいる。長々と漱石全集からこの種の記事文を引用して低徊趣味を満足させる余白をもたない。漱石は明治33年(1900)から明治36年(1903)まで英国に留学して何をしたか。これも全集を具に読めばわかる。けれどもこの問題は本題と甚だ連関があるので必要な事を要約する。生活を切り詰めて本を出来るだけ買った。下宿も最低の所で我慢した。しかも二年間に下宿を数回かえたが、何れもロンドンの北方の郊外、又はテムズ河の南岸ばかりで、当時ロンドンの醜さを露呈してい

るにちがいない場所ばかりである。これではロンドンの地誌も風物も余りわからないのではないか。そして、漱石は広い英国の風物には殆んど接していない。つまり英国の現実との接触は最小限度に止めている。ロンドン大学における W. P. Ker の講義の傍聴も長くは続かなかった。Ker 教授の世話で Shakespeare 学者の W. J. Craig の所に個人教授を受けに行ったが、これも満足ではなかった。Cambridge にも Oxford にも行くことを諦めた。風物にも接せず、交際もせず(交際は金がなくてできなかった)、特に図書館へも通わず、学問的な会合にもほとんど出ない、これではイギリス留学の意味も半減する。結局、英国の文学の研究も下宿に閉ぢこもって、読んで、考えて、ノートを書き上げるのみとなった。

III

漱石はどうしてイギリス文学を学んだのであろうか。「余は少時好んで漢籍を学びたり。之を学ぶ事短かきにも関らず、文学は斯の如き者なりと定義を漠然と冥々裏に左国史漢より得たり。ひそかに思うに英文学も亦かくの如きものなるべし、斯の如きものならば生涯を挙げて之を学ぶも、あながちに悔ゆることなかるべしと。余が单身流行せざる英文学科に入りたるは、全く此幼稚にして単純なる理由に支配せられたるなり。」こうして漱石は英文学と縁を結ぶことになったのだが、「余は漢籍に於て左程根柢ある学力あるにあらず、然も余は十分之を味い得るものと自信す。余が英語に於ける知識は無論深しと云う可からざるも、漢籍に於けるそれに劣れりとは思はず、学力は同程度として好悪のかく迄に岐かるるは、両者の性質のそれ程に異なる為ならずんばあらず、換言すれば漢学に所謂文学と英語に所謂文学とは到底定義の下に一括し得べからざる異種類のものたらざる可からず」この漱石の告白から推測をゆるされるならば、一つの問題点が浮び上る。それは漱石が、イギリス文学の作品を漢文学を読むような読み方で読んだことになるのではないか。この点は吉田健一氏^{註8)}も指摘したように「私達は(支那語に熟達した学者を除いて)漢文の意味は取れるが、その音に就いて語ることは出来ないのであって、それでも漢文を一種の文学として成立させているのは、漢学を日本風に読んだ時の響きが、

そこに独自の調子を出しているからである。併しそれは、ヨーロッパ文学よりも遙かに音感が発達している支那文学の原文を読むことにはならないのであり。どこの国の文学でも文章の『意味』を言葉から切り離して考えたのでは、その意味さえも実際は掴めない。でなければ『音楽が不当に占めた芸術の首座を詩の為に取り返す』というマラルメの野望は単なる世迷いの言でしかないのである。」ここに問題点があって、漱石がイギリス文学を意味本位に読んでいたことはあらそえない事で、こういう事例は「文学論」その他から、少くない例をあげることはできるであろう。これは言語芸術の文学作品を読みとる重要な問題点なのである。

英国人のうちでも言語感覚の秀れた読者のように英国の詩を鑑賞することがむずかしいという問題は確かにある。「留学中に段々文学がいやになった。西洋の詩などのあるものを読むと、全く感じない。それを無理に嬉しがるのは、何だかありもしない翅を生やして飛んでいる人のような、金がないのにあるような顔をして歩いて居る人のような気がしてならなかった。」というのが漱石の述懐であるが、英語の音律的鑑賞は日本人にとってむずかしい事に違いないが、又、漱石がこの表現通り英詩の音感に無関心であった筈はなからうが、それにもかかわらず英詩鑑賞に最も必要な音律感の不足が問題となるのではなからうか。

次に漱石が渾身の力を出して作りあげた「文学論」だが、この「文学論」は「文学評論」「英文学形式論」と共に漱石が科学的に文学の本質を究めようとしたものであった。「余は下宿に立て籠りたり。一切の文学書を行李の底に収めたり。文学書を読んで文学の如何なるものなるかを知らんとするは血を以て血を洗うが如き手段たるを信じればなり。余は心理的に文学は如何なる必要あって、此世に生れ、発達し、頽廢するかを極めんと誓へり、余は社会的に文学は如何なる必要あって、存在し、隆興し、衰滅するかを究めんと誓へり。」こうして出来たのが「文学論」であるが、そして、 $[F+f]$ の公式とそのヴァリエーションズに還元して、漱石流の論理的展開を行って実に見事であるが、それでもなお「文学とは何である

か」の疑問が依然として残る。尤も文学というものの本質的な性格のつかみにくさにあることは勿論だが、「漱石は自分自身がものを書く限り、文学の形式とか、文学で言葉の占めている位置とかに煩されることなく、他人の作品に対してもそういう読み方をした」とする吉田健一氏^{注9)}の評言は当たっているように思う。一つの文章の焦点をなしている観念をFとし、それに附随する感情をfとして、 $[F+f]$ が凡ての文学作品の内容、それ故に漱石にとっては文学作品そのものが取る形式であるというような命題を文学論の中心に置くことが出来たのである。そしてこの方法を誤れば、後は言語学が或は考証学まで後退することになりかねない。

更に筆者が指摘したいことは次の点なのである。「文学論」形成のため漱石があげたイギリス文学は Shakespeare や Milton から、Pope, Wordsworth, Shelley, Keats のような詩人から、その他、詩に限らず、多くの作家から適当な箇所を随意、もち出し引用する漱石の博識はすばらしいが、文学の研究においては先づ第一文学作品そのものが重要であって、文学作品を統一された有機体として考察することを主眼とするものと考えて。そうしないと、イギリス文学を研究して、イギリスの文学とは別のものを求めているといいかねなくなる。こうした方法のみでは、イギリス文学の特性を完全に理解することは出来にくい。漱石にしてみれば、それはかの有名な「自己本位」の確立の一つのあらわれであったかも知れないが、漱石にとって既成の文学作品では満足が出来なくて、独自の文学を作り出す仕事、即ち創作へと立ち向ったわけではあるが、それは、イギリス文学の研究と別れをつけていることにもなる。ここに大きな問題点がひそんでいる。

IV

夏目漱石と違って、Henry James の異質文化接触は遙かに広汎で徹底していたといえるであろう。James は生れて6ヶ月め兄 William と共に父(Henry James Sr.)と母(Mary Walsh James)に連れられてヨーロッパに行き、フランス、イギリスに滞在。この James の生い立ちについては筆者は度々詳述したから過去の論文^{注10)}にゆずるこ

とにするが簡単にここで要約する。1855年から1858年まで再び家族はヨーロッパに旅行する。Geneva, London, Paris そして Bonn と移り住む。十才を少し越した少年の目でヨーロッパの偉大さと Paris を意識した。とりわけルーブル博物館には異常な感銘を受けた。これは James 文学の一つの特徴である絵画的性格をうえつけた最初の機縁であったかも知れない。James は幼少の頃の思い出をあたためて“A Small boy and Others”) という自伝ともいうべき作品に書き残している。1859年から1860年へかけて三度目のヨーロッパ旅行をする。James はフランス語がすばらしく堪能で17才頃既に Alfred de Musset や Nénus dille Merimée のものを翻訳している。James のフランス語に豊かな才能を物語る確証は Edith Wharton (1862—1959)の次の言葉が示すのである。即ち, “French People have told me that they had never met an Anglo-Saxon who speak French like James; not only correctly and fluently, but—well, just as they did themselves; avoiding alike platitude and pomposity and using the language as spontaneously as if it were his own”^{注11)} 第四回の外遊は 1869 年から 1870年へかけて (26才の時) England, France, Switzerland, Italy と旅行する。第五回めは1872年 (29才の時)妹 Alice と叔母 Katherine Walsh と共にヨーロッパ旅行に出た。第6回めは1876年 (33才の時) いよいよヨーロッパ永住を決意して France へ行き、同年12月居を London に移し、それ以後英国に住居を定めたのである。そして各地を旅行し、1904年久し振りにアメリカに帰る。この時、出来たのが “The American Scene” (1907) であった事は読者の知るところであろう。

James にとって、英国 (ことに London) は住むために、フランス (ことに Paris) は学ぶために、イタリー (ことに Rome) は愛するためにあったようなものである。特に London は James を迎え、数週間のうちに、イタリーにも Paris にも、見なかった空気に James を包みこんでしまった。かって、アメリカにいた頃から抱いていた理想的なロマンティックな古いイギリスの面影を感じさせてくれた。London は James になにか

血縁的なものさえ感じさせたのであった。それでも所謂「大きなアングロサクソン全体」に属する一人として英国に居を構えて40年ばかりに及びながら猶かつ自分を一人の異国人と感じない訳には行かなかったのか第一次大戦2年目 (なお異国人として監視のめであつかわれるのを気にしてか) 1915年英国に帰化することになったのであるが、こうして James の生涯における異国との接触をみると、James 程、その経験の豊かな人は少いであろう。又、James 程広く外国の文学を読破研究した作家も少いであろうし、又多くの後輩達に影響を与えたように、多くの先輩作家達から学び取った人も少いであろう。アメリカの Nathaniel Hawthorne (1804—64) をはじめ、イギリスでは殊に George Eliot, そしてフランスのリアリスト達、殊に Gustave Flaubert (1821—80) Honoré de Balzac (1799—1850), Alphonse Daudet (1840—97) 更には近代劇の創始者ともいえる Henrick Ibsen (1828—1906), ドイツの Johann Wolfgang von Goethe (1749—1832), そして最も親しかったロシアの作家 Ivan Sergeevich Turgeniev (James は Turgeniev を用いないで Turgeniff の方を採用している) をよく読了した。^{注12)} 最近アメリカでは Greek tragedy の影響を指摘する批評家もいる位で、これは James が外国文学の接触がいかに広汎であったかを示すものであろう。「アメリカ人でない人が James を本式に鑑賞できると思わない。James の小説に登場するアメリカ人のなかで最も巧みに描かれた人物達は豊かな実在感があり、人間関係をあらわす外的な細部があって、ヨーロッパの読者には容易に気づかないものなのだ」(1918年 “Henry James 論”)^{注13)} 又「Henry James は英国人にはむずかしい作家である。なぜならば James はヨーロッパであるからである。」(1924年 “Henry James 論”)^{注14)} と述べたそのすぐ後に Eliot はこうつけ加えている。“On the other hand, the exceptionally sensitive readers, who is neither English nor American, may have a position of detachment which is an advantage.” この “sensitive readers”こそ異質の外国文学を充分読み得る資格のあるものといえるであろう。

V

さていよいよ夏目漱石と Henry James の場合における異質文化接触の問題を整理し、両者の相似点と相異点を考えてみる段階にきたようである。此の両者が外国文学研究者であり、同時に創作作家（小説家）であった事は相似しているし、国を異にしているけれども同時代の作家でもあった。その文学的才能については両者共秀れていたことは誰も疑いをはさまないであろうと思う。その語学力についてはいささか異にしている。勿論科学的に比較はし得ないが、漱石の英語の力と James のフランス語の力とは何としても後者の方がより秀れているといえるのではないだろうか。尤も当代の作家の中で漱石が最も語学力の強かった事、その学力において漱石に勝る人が至って少なかった事は考えられる。だが、漱石の語学力を森鷗外と比較してみても後者に団扇を揚げることになるのではないか。このことは、鷗外の伝記や鷗外自身の日記などからでも知ることが出来そうである。鷗外は23才でドイツに行く前に既にドイツ語には精通していた。「語学に熟達するのに日本を去る必要がなく、まして読書は、どこにいても出来る」といいはなった程、ドイツ語は熟達していたといわれるし、鷗外は漱石とちがって、大学を卒業した時からドイツ留学を望んでいた。鷗外がドイツに留学を命ぜられたのは明治17年、大学の医科を卒業して、陸軍省に入った翌年だと鷗外の年譜が示してくれる。鷗外自身の言葉で言えば、「二十代で、全く処女のような官能を以て、外界のあらゆる出来事に反応して、内には曾て挫折したことの無い力を蓄えていた時」である。漱石はこれとちがって、英国に留学を命じられた時は可なり年を重ねていたから、外国に行くことによって、物の見方や外国語の修正にまで留学が特に有効であったとは考えられない。しかも英国へ留学して英語を研究することには関心が薄かった。読解力の強かったであろう漱石も英国の地における英語を耳にして、どの程度満足に理解し得たか疑問が残るのではなからうか。これは英詩の音律感なども関連のないことではない。この点、James は前述のように、外国語であるフランス語を読み書き話し聞くことは容易な業といえる位、フランス語

に熟達していたから、この点からでも異質文化摂取は James の方が豊かであったといえるのではなからうか。

次に漱石が（英）文学者として特に力を集中したのは「文学論」「文学評論」「英文学形式論」であるが、これらは科学的に文学の本質を考究しようとしたもので、この三著書を通して目立つ特徴は文学と科学との接近、いかえれば、文学を考える場合の科学的方法の応用ということであろう。「文学評論」のなかで漱石も言っているように、科学は「何故に」という質問には一切答えないで「如何にして」ということだけを扱う精神活動の形式であるから、文学が如何にして発生し、文学作品が如何にして私達を感動させるかという問題も、科学的態度でたちむかえんと考えていたようである。しかし、この問題は別に取りあげ詳しく論じるとして、文学に科学的研究法をあてはめることは、その研究過程で充分応用されてよい方法であるけれども、科学的方法で文学が何であるか、その全貌を全面的に極められるとは云えない。筆者は常にそう考えている。度々論述を重ねたように、文学とは一口に言って文学作品のことであるから、そして文学作品というものはそれが傑作であればある程統一された有機体であるのだから、それを科学的方法で分析したり、作品のある部分を随意、ぬき出し集積整頓してみたところで、文学作品が全体としてわかるものではない。全体を知る為はその研究過程においてその方法を応用することは効果を生む場合も多いであろうが、分析されたばらばらの部分はも早文学ではありえないと言える。漱石が博識をもって英文学の作品のところどころから選びぬいた部分、（その部分部分は漱石として出来得るかぎり組織的に構成したものであり、趣味の普遍性を信じ、又それを認めたとしても）の構成から生れる文学論が、イギリス文学の特性と本質を落度なく取り扱えるとはいい難いのである。文学の本質を追究する時、誰でも突き当る困難は文学が鑑賞の上に立つ存在であって、その鑑賞は個人の嗜好や趣味によって行われることである。尤も漱石は一応趣味の普遍性を認め、批評的鑑賞とも呼ばれる、主観に基準を置いた科学的研究法の可能を信じて行ったことではあった。漱石は強調して、「余は此

の事実〔鑑賞的解釈〕を証左として出立す。もし此事実を否定するものあらば根抵に於て余と感受的能力を異にするが故に論弁を要せず」と断言している。即ち、漱石的英文学鑑賞法であるといえる。実に野心的な実に優れた文学論ではあるが、それでも文学とは何であるかの疑問が残る。イギリス文学の特質とは何であるかに関しては剰余が残る。文学を研究する場合、そのすべてに科学的方法を当てはめて行こうとする時、割り切れるとは限らない。割り切れない場合は切り捨てる。切り捨てれば割り切れる。けれども割り切れないで切り捨てられた部分は、有機的統一体の一部として実に大切なものなのだ。このことを特と考えねばならぬのである。

次に、取り上げたい問題点は異質文学研究における「文学と宗教」の関連である。これは漱石の場合のみでなく、広く日本人の場合に起る問題だといえるであろう。イギリスの文人達（或はアメリカの文人達）と日本人との間に起る乗離感（或は異質感）、私達が外国文学作品を読み取って行く場合に感じ取る異質感は、おそらく、それが宗教（キリスト教）の問題に関連すると問題が大きくなる。漱石対キリスト教の問題であるが、そしてこれは別の機会に考察したいが一口に言って、漱石はキリスト教に対して冷淡であったといえるのではないだろうか。それを証する実例はここでは一一例挙しないが、その実例は漱石全集を具に読めばわかるだろう。冷淡とまで行かなくても、漱石自身の言葉でいえば「耶蘇教に興味を有て居らぬ余」という態度である。漱石に、漱石のめにつつたクリスチャン達の印象からこのことが起ったのであるか、それともキリスト教自身に対してであるかは明瞭に知る由もなからうが、ともかくもキリスト教に冷淡であった。尤も、漱石がキリスト教に関する知識をそなえていた事は確かであろうが、信仰問題に立ち入ろうとしない自己限定を示しているといえるかも知れない。

VI

Henry James とキリスト教の場合は、筆者は既に二回にわたって「Henry James と宗教」に関し詳しく論じたので、それにゆずりたいが、James も、その宗教（キリスト教）意識が一個の

哲学としても、又、信条としても実を結ばなかった。これは父（Henry James Sr.）の教育の影響があったことも認めねばならない。幼少の James に色々影響をあたえたと思われる父は長老教会信者の息子であり^{注15}、聖職者になりたいという志願さえもった人で Emanuel Swedenborg^{注16} の共鳴者でもあり数冊の神学書の著述に生涯を捧げた人であった。詳細な事は James 自身の自伝的作品“A Small Boy and Others”や Hartley Crattan の著書や F. O. Matthiessen の“The James Family”などを読めばよい。ただただ大切な事は、やはり James 自身の言葉（James は personal な事柄に関しては、あからさまに語らず、至ってひかえめであるが）に拠らねばならない。

James の次の言葉は少し長いけれども重要なので引用する。“……our young liberty in respect to church-going was absolute and we might range at will, through the great city, from one place of worship and one from of faith to another, or might on occasion ignore did; ……going forth hand in hand into the sunshine (and I connect myself here with next younger, not with my elder, brother, whose orbit was other and larger) we sampled, in modern phrase, as small unprejudiced inquirers obeying their inspiration, any resort of any congregation detected by us; doing so, I make out moreover, with a sense of earnest provision for any contemporary challenge.

“What church do you go to?” — the challenge took in childish circles that searching form; of the form it took among our elders my impression is moral vague. To which I must add as well that our “fending” in this fashion for ourselves didn't so prepare us for invidious remark — remark I mean upon our pewless state, which involved, to my imagination, much the same discredit that a houseless or a cookless would have done — as to hush in my breast the appeal to our parents, not for religious instruction (of which we had plenty, and of the most charming and famil-

ar) but simply for intruction (a very different thing) as to where we should say we "went," in our world, under cold scrutiny or derisive comment. It was colder than any criticism, I recall, to hear our father reply that we could plead nothing less than the whole privilege of Christendom and that there was no communion, even that of the Jews, even that of the Swedenborgians, from which we need find ourselves excluded. With the freedom we enjoyed our dilemma clearly amused him it would have been impossible, he affirmed, to be theologically more *en règle*."

James は幼時、このような環境にそだっている。父の教育は James に色々影響をあたえたが宗教に関してもこのようであった。あらゆる教会に出入し、あらゆる宗派に接することは端的に言うところ、宗教がないのと同様であったかも知れない。こうして父の宗教的煩悶をいくらか受けついだことも納得出来るというものだが、James は成長してから、過去の怠慢の罪を償うかのように、しげく教会に足をはこんだことさえある。この事は Leon Edel がやや詳しく "Henry James, The Untried Years 1843—1870" ^{注17)} の中で触れている。James 自身と同様 James の作中人物もよく一人教会や寺院へ足をはこんでいる。「ある寺院へ出かける。それは古い宗派の寺院で、そこには一つの役目があった。おそらく死者を祭ることが役目で、高い祭壇には灯明のひのたえることはなかった。これは心を楽しませてくれる光景だったので、ほっとして、やわらぐ気持で椅子に腰を沈めた。この世に教会があるのは仕合わせなことだという感が、今まで味ったことのない実感として胸を打った。」と George Stranson ^{注18)} は述べている。James は Roderick Hudson ^{注19)} がセントピーターズ寺院にとびこんだ時の気持を美しい表現で述べている。「広くすみきった雰囲気の中では、どのようにむずかしい悩みごとも、きまって解決されるのであった。心の痛みから、ローマの雨まで、この大礼拝堂は心配ごとを忘れさせてくれた。」又 Lambert Strether ^{注20)} はノートル・ダム寺院にお参りするのだが、「この聖餐式というものも、他の儀式と同様に、とにかく役に立っ

た。本当に浮世を逃れてきた者にとって、世俗の雑事は無用のものになってしまうことを心の奥底からわからせてくれた。」と述べる。カトリック教会は後年に至るまで James の心に何か訴えるものがあったようである。Graham Greene ²¹⁾ も James が年を重ねるにつれてカトリシズムに共鳴をおぼえていったことに触れている。James はカトリック教会を評して「全世界のなかでもっとも感銘をあたえる制度」と述べている程である。けれども James はキリスト教(カトリック)の思想の研究に没頭したこともなく、またその宗規にも無関心であったようだ。James の宗教は、F. O. Matthiessen ²²⁾ も T. S. Eliot の言葉を援用して「精神的実在を意識していた点では比まれ」であったが「宗教思想に対しては無関心」であったと述べている。しかし、更に Matthiessen は附言して、「現代のような危機的な思想風土にもしその精神が形成されたとしたら、James のような感受性の持ち主は、おそらく Eliot と同様、宗教的秩序が必要であることを痛感したことであろう。」という推測的な見解を述べているが誤っていないであろう。Randall Stewart は、アメリカ文学史上で Hawthorne と Eliot と James を三大キリスト教的ヒューマニストにあげているのであり、Stephen Spender ²³⁾ も James に New England のピューリタンの人生観が浸透していると述べたし、Quentine Anderson が James の後期の三大作 "The Ambassadors," "The Wings of the Dove", "The Golden Bowl" を "Divine Novel" と呼ぶに至るまで、James の文学作品には背後に道徳性と宗教性が含まれていることに気づくであろう。James の場合は漱石の場合とは余程違っていて、やはりアメリカ人とヨーロッパ人の中には同じ血が流れていて、同じ神をいただいているということが言えるだろう。

VII

さて、いよいよ、この論述の終りに近づいたので一応問題を取りまとめる段階にきた。優れた外国文学研究者であり、同時に見事な自己の文学をつくりあげた二人の創作家 James と漱石について考察を行ったが、この二大文人の場合ですら外国文学研究が容易でない仕事だということがわか

るであろうと思う。漱石の場合よりは、Jamesの場合を考察すると、異質文化を身をもって豊かに受けとった文人でありながら、なおかつ異質文化摂取の困難さを味うとすれば、日本人にとっての、外国（英米）文学の研究という点のみから考えてみても、外国文学の研究は、社会科学の場合とちがって、その論理が、心理や倫理や更に美的感覚や、信仰の領域と深くからみ合ってくるので（言葉（外国語）の難関を通り過ぎたとして）容易ならぬ業となってくるのである。

私達が外国文学の研究に立ち向う時、外国の作家や作品を理解するプロセスを外国の研究者や、批評家の指示にそのまま追従して行くのであれば事は比較的簡単だが、そのプロセスのどこかの段階で、日本人（といっても皆が同様ではあり得ないだろうが）固有の美的感覚や倫理感や信仰が現われる時、そこに異質性の差額につきあたる。漱石の場合、所謂「自己本位」の立場も生じてくる。漱石がもつに至った英文学に対する認識的懷疑が生じる。漱石の言葉でいえば「今迄は全く他人本位で、根のない萍草のように、其所いらをただでたらめに漂っていたから、駄目であった」という自覚が起るであろう。これは漱石のような優れた文才をもち見識をもった文人にしてはじめて意味のあることで、そして漱石は漱石の外国文学観と自己の文学を創りあげたのであるが、外国（英）文学に対して、自律的な日本人としての主体性に基づいて「自己本位」ということも、言い得て勇壯であるが、このことを一般研究者が不用意に援用することは愚かであり甚だ危険である。先づ何より外国語修得の問題がある。外国文学を研究すると言うが、どの程度の外国語の力があるのであろう。漱石のように英語の力が「達人の域に達していた」（森田草平の評言）人でさえが、日本人の日本で養成した英語（母国語として使用しない言語）では、その音感という点で充分ではないのでなからうか。これはおおげさに言うと運命なことであろうが、ここに一つの限界を意識しないわけに行かない。この音韻に対する能力の限界は、しかし、外国の詩を研究する時に特に問題となる。T. S. Eliot はフランスの詩人達（例えば、Baudelaire や、Mallarmé や Veléry など）が Edgar Alan Poe を称えるのは彼らの英語力の不

足に基因するときえいっているのを知る時、私達の英米詩研究の容易でないことを知るであろう。それ故に私達外国文学研究者の音感の育成は第一に心掛けねばならぬ必要条件であるといえるだろう。文章の意味を言葉から切り離して考えたのでは充分でない。「音楽が不当に占めた芸術の首座を詩の為に取り返す」と言った Mallarmé でさえ外国語（英語）の力の不足を Eliot から指摘されているのだから、私達の英語力の不足はおおいかくせないであろう。川端康成氏が「日本語で審査してもらったらもっとよかった」といったのは、勿論、翻訳された作品が、どこまで自分のものであり得るかという不安であったろう。アジアで初めてノーベル賞を受けたのは周知のように Tagore であったが、Tagore は母国語のベンゴリ語で創作したが、又、自分の作品を（タゴールの英語力は強かったであろうから）英語に直している。このような場合は至って少いが、創作家と翻訳者とは同一体であるわけである。川端氏の場合も、上出来の翻訳であっても端的に言えば、外国人に通じたのは、言葉（全面的に言葉）ではなくて、芸術の声であったのであろう。翻訳は意味を伝えてくれるであろうが、原書の言葉の音韻又は音律までも伝えることは当然不可能な事なのだ。言葉のもつ“nuance”というか、「意味の微妙」（“delicate shade of meaning”）というか、それまで伝えることは困難である。だからといって翻訳文学の価値が皆無だということにはならない。翻訳論については別の機会にとりあげたいが詩の場合でも散文の場合でも、寓意的性格をもった形象の場合は知的な操作によっていくらか困難を克服できるが象徴的性格をもつ形象の場合は、その象徴性が欧米の人間の根本的なものにつながっているため困難が倍加されるのである。

こうして、私達は、異質文化（文学）摂取の場合には真先きに言葉の問題それに続いて前述のような諸種の問題があって外国文学研究は容易な業とはいえない。前述のように Henry James が同文同種の英国に「大きなアングロサクソンの全体」に属する一人として、しかも40年もの間アメリカ人として英国に住んでいながら、猶、自分を一個の異邦人（“stranger”）として発見しなければならなかった James の事を考えると、私達日本

人としてイギリス或はアメリカの文学をどの程度理解し、消化し得るか、否定的な印象さえ覚えな
いわけにはゆくまいが、それは勿論一つの感傷に
終らせてよいものではなく、外国文学研究におけ
る必然な限界性と同時に、そこから自覚しなければ
ならない自己の研究の価値について常に反省し
て、研究と努力をおしなくてはならぬと思うのであ
る。(1968.11.30)

注1) 「明治文壇総評」正宗白鳥(昭和3年6月)

注2)注3) a) “The Art of Fiction” in Walter Besant
(and Henry James) The Art of Fiction (Bo-
ston, Cupples, Upham & Co., 1885) (以後 James
の “The Art of Fiction” は諸種の版に入れられ
た) 例えば, Henry James “The Future of the
Novel—Essays on the Art of Fiction” Edited
with an Introduction by Leon Edel. (Vintage
Books, New York. 1956)

b) “The Art of the Novel” by Henry James
with an Introduction by Richard P. Blackmur,
1953. Charles Scribner’s Sons, New York, そ
の他 James の評論

注4) “The Lesson of the Master: Ezra Pound and
Henry James” by Alan Holder. “American
Literature” (Vol. 34.)

注5) 夏目漱石全集

注6) “The Golden Bowl” by Henry James. “The
Novels and Tales of Henry James” The New
York Edition. Henry James: “The Golden
Bowl” Introduction by B. P. Blackmur. Grove
Press. New York, 1952)

拙稿 a) 「Henry James 国際的テーマ小説の問題
点」

(関西学院大学「論攷」第8号1961)

2) 拙稿 b) ジェイムズ文学における「自由精神」
の問題」(関西学院大学「論攷」第13巻
1966)

注7) 長篇 a) 「ロデリック・ハドソン」(「世界文学大
系45筑摩書房」)

b) 「アメリカ人」(「現代アメリカ文学全
集6」荒地出版社と「世界文学全集Ⅱ—
12河出書房」)

c) デイジー・ミラー」(「岩波文庫」と「世
界文学全集河出書房」「新潮文庫」)

d) 「国際エピソード」(「岩波文庫」)

e) 「女相続人」(「角川文庫」)

f) 「ボストンの人々」(「世界の文学26中
央公論社」)

g) 「ねじの回転」(「岩波文庫」と「新潮
文庫」と「現代アメリカ文学全集6 荒地
出版社」と「世界文学大系45筑摩書房」
と「世界文学全集新潮社」)

h) 「使者たち」(「八潮出版社」と「講談
出版社」)

短篇 a) 「ヘンリー・ジェイムズ短篇集」(「あ
ぼろん社」)

b) 「智慧の樹」(「あぼん社」)

c) 「四度のお合い・初老」(「英宝社」)

d) 「アスパンの恋文」(「八潮出版社」)

e) 「ヘンリー・ジェイムズ短篇選集」(第
一卷既刊 2.3.4巻現時点では未完「音羽
書房」) 評論「ホーソン研究」(「南雲堂」)

注8)注9) 「東西文学論」吉田健一(「垂水書房」)

注10) 1) 拙稿 a) 「Henry James 1843—1881」関西学
院大学(「社会学部紀要」第3号1961)

2) 拙稿 b)注6) 拙稿 a)

3) 拙稿 c) 「ジェイムズ文学本質解明への一課
題」関西学院大学(「論攷」第12号1965)

4) 拙稿 d) 「『アメリカ人』をどのように読むか」
(「論攷」第7号1960)

5) 拙稿 e) 「Henry James と Mary (Minny)
Temple」(関西学院大学「英米文学」
Vol. VI, No. I 1961)

6) 拙稿 f) 「ヘンリー・ジェイムズと宗教」(「
関西学院大学「論攷」第10号1963)

7) 拙稿 g) 「宗教と文学」(「基督教文化学会年
報」第11号1964)

注11) “The Legend of the Master” Compiled by S.
Nowell-Smith, 1947 Constable and Company
Ltd. P. 19.)

注12) 「文学における影響の問題—Henry James の場
合—」(関西学院大学「英米文学」Vol. IV, No.
1 1959)

注13)注14) 1) 拙稿 a) 「ジェイムズ文学における題材
と手法の問題」(関西学院大学「論攷」
第11号1964)

2) 拙稿 b) 「James 文学とその批評」(関
西学院大学「英米文学」Vol. IX, No.
11965)

注15)注16) 注10) 拙稿 b) 拙稿 9)

注17) “Henry James—The Untried Years, 1840—1870”
(Rupert Hart-Davis, 1953)

注18) George Stranson (“Altar of the Dead” の主要
人物)

注19) Roderick Hudson (“Roderick Hudson” の主要
人物)

注20) Lambert Strether (“The Ambassadors” の主
要人物)

注21) “The Lost Childhood and other essays” by
Graham Greene. 1952. the Viking Press. New
York.

注22) “Henry James, The Major Phase” by F. O.
Matthiessen. Oxford University Press 1946.
P 145.

注32) “The Destructive Element” by Stepen Spen-
der. 1953. Jonathan Cape, London.